

学長対談 file.10



熊本県知事 蒲島 郁夫氏 × 熊本大学長 小川 久雄

小川学長就任第1回目は、熊本県知事の蒲島郁夫氏をお迎えしました。時代の変革期に求められる「人材育成」をテーマに、熊本大学が果たす役割について熱く意見が交わされました。

県と大学の連携が、 新しくまもとの元気を つくっていく ～時代が求める人材を、熊本大学で育成

75年の生涯で一度だけ怒ったのは、今回のアサリの産地偽装問題に関してです。これほど熊本県への信頼が揺らいだ出来事はありません。75年にして初めて怒りの遺伝子が働きました。血糖値が上がって病院に行ったら、知事が怒っているからですよ、と言われました。困難な時代には挑戦、リスク、称賛。この3つができる人材が必要です。小川 私も同じ考えです。いつも強調しているのは「コミュニケーションが取れる人」です。いくら優秀でもコミュニケーションが取れない人は伸びていきません。それには教育が大事です。どういう風に育てるか。基本的には、その場でコミュニケーションが取れるよう教えます。

に伸ばすことに特に魅力を感じます。蒲島 小川学長のような、果敢に挑戦する先生はなかなかおられませんね。大学も変革の時代ですから、先生のような方が熊本に來られたことは大きいと思います。私は教授時代、東京大学では普通の講義もしていましたが、ゼミでは一切教えることはしていませんでした。私がやるのは二つだけ。一つはテーマを与えること。二つ目は、成果を本にすること。今の副知事の木村君が一期生のゼミ長で、リーダーシップを発揮し、それをサポートしたのが前の副知事の小野君。この二人を中心に20名のゼミ生が「新党全記録」という素晴らしい本を完成させました。良い意味で任せるのも一つの方法です。小川 昨年3月、知事が私の前職である大阪の国立循環器病研究センターにお越しになりましたね。そこでは、30ヘクター

地震、豪雨、コロナの三重苦 「逆境の中にこそ夢がある」

熊本地震、豪雨災害、新型コロナ、未曾有の危機を体験されての、熊本県知事としての思いをお聞かせください。

蒲島 私が知事になったのは平成20年4月です。その時、熊本県には大きな3つの課題がありました。一つ目は水俣病問題、二つ目が財政再建、三つ目が川辺川ダム問題です。川辺川ダム計画は平成20年9月に白紙撤回しました。そして、令和2年7月に大水害が起こり、12年前の判断から方針転換をすることになりました。現在、球磨川流域の新たな治水の方向性として、命と環境の両方を守る「新たな流水型ダム」を含めた「緑の流域治水」を進めています。

私は「逆境の中にこそ夢がある」という生き方をしてきました。そして今、私は知事三期目の初日に発生した熊本地震、令和2年7月豪雨災害、そして新型コロナウイルス感染症のまん延、この三重苦への対応にあたっています。大きな災害からの復興においては、「創造」という「夢」を加えた創造的復興を進めています。これは、以前よりも良い形に復興する、というものです。コロナでは先手先手で対応してきました。私は、災害対応や感染症のような逆境において、リーダーは強いリーダーシップを発揮しないとイケないと考えています。

小川 「逆境の中にこそ夢がある」という言葉は、私の人生の体験においてもよく感じています。いい言葉だと思っています。蒲島 令和2年の7月豪雨災害において

ルの国鉄操車場跡地に健康医療都市ができています。知事は、それをご覧になって、こういうのはいいなあ、どうしたらいいんだらうとおっしゃって。私は「ブラッグシップがあればできます」と答えました。そうすると、「やっぱりそうか」と言われた。その会話が印象的でした。国立大学は各県に1つずつあります。地方公共団体と一緒にやらないと何もできません。国とも一緒にやらないと毎年の約12億円ずつ減っていくことを気にしている大学関係者もいますが、国の方針は、運営費交付金以外のところは自分たちでカバーしなさいということ。減っていくのであれば自分で取ってくる努力が必要。それには、企業や県の協力が必須です。

蒲島知事は視野が広いですよ。グローバルな視点で考えておられます。私も、これまでいろんなところを見てきました。もちろん、一つの場所にとついて立派になっていく、という方もいますが、いろんなところを見ると視野は広くなると思います。そういう点では、私も自分の経験を活かして、県と協力しているいろいろやっていきたいと考えています。

TSMCの進出は、 百年に一度のチャンス

台湾のTSMCの熊本進出が決まり、半導体の人材育成が急務となっています。蒲島 台湾のTSMCの進出は、県政始まって以来の大きなプロジェクトとなります。TSMCとソニー、そこにデンソー

は、まず科学的検証を行いました。それから30回にわたって地域住民等の皆様からの話を私が直接伺いました。これらを踏まえて、私が決断したのが、命と清流の両方を守る「緑の流域治水」、「グリーンニューデール」という哲学をもとにした新たな流水型のダムを含む治水対策です。このことを、令和2年11月19日に議会で表明しました。この方向転換の政治というのは私も初めての経験であり、リーダーとして一番難しい判断でした。

挑戦し、リスク、 称賛できる人材が必要

時代の変革期に求められる人材をどう育成していくか。リーダーが果たすべき役割についてはどうお考えでしょうか。

蒲島 これまでの13年間は、激動の期間でした。常日頃から県の職員に伝えているのは、「皿を割れ」ということ。何事にも挑戦しようということです。リスクを恐れず挑戦して、皿を割ってもいいんだと。私が責任を取るから、前に進もうと話しています。

それから「相互リスクベクトル」。議会でもそうですが、私は一生懸命話を聞きます。相互リスクベクトルがあるから議会との関係もうまくいっています。

もう一つ、私は職員を怒ったことがあります。小野元副知事は、私には怒りの遺伝子がないと言っていましたね。その代わり、ほめます。「蒲島賞」という職員への表彰制度を作っていて、年に1回表彰します。今は、蒲島賞を取りたい若手がいっぱいいるんですよ。

が加わったことがすごく大きいですね。1兆円の投資と1700人の雇用が生まれます。国際的企業ですので、海外からたくさんの方が来るでしょう。

熊本県は以前から半導体産業の集積地ではありましたが、これをきっかけに、日本経済のウィークポイントである半導体で日本経済の安全保障の一翼を担っていきたい。熊本が半導体を安定供給することで、日本経済の一翼を担えることは県民としての誇りになりますね。

多くの波及効果もあります。県内企業の技術職のレベルが上がります。海外の魅力的な人材も入ってきます。グローバルな人材の育成にいい効果をもたらします。そこで大事なのは、県と大学が連携した人材育成です。大学への期待は、半導体における人材の育成を一緒に進めてほしい、ということ。熊本大学は半導



「半導体人材の育成は、県と熊本大学の共通認識です」と、蒲島知事



熊本県知事 蒲島 郁夫氏

熊本県立鹿本高校卒業後、地元農協に勤務。農業研修生として渡米し1974年ネブラスカ大学農学部卒、1979年にはハーバード大学大学院修了(政治経済学博士)。筑波大学教授、東京大学法学部教授を歴任後、2008年から熊本県知事、現在4期目。東京大学名誉教授。趣味は、読書、球磨焼酎。

K A B A S H I M A I k u o

TSMCの進出を機に、日本経済の一翼を担いたい

先にある未来像として、熊本の強みを生かし、日本の「5つの安全保障」に貢献したいと考えています。

一つ目が、経済の安全保障です。半導体は産業の脳であり、その需要は世界的に拡大しています。日本はかつて半導体の世界シェアの半分を占めていましたが、それが今は1割です。これでは弱い。TSMCの進出をきっかけに、経済安全保障の一翼を担いたいと考えています。

二つ目が、感染症に対する安全保障です。日本には、国産のコロナワクチンがありませんでした。しかし、本県にはKMバイオロジクス(KMB)が存在します。KMBは、熊本県も株主です。そこで、令和3年5月、当時の菅首相にKMBのワクチンをぜひ使ってほしい、実用化に向けて支援してほしいと頼みに行きました。

た。岸田首相にも同年11月にお願ひし、ご理解いただきました。県内で国産ワクチンが完成することで、熊本への存在感を發揮できると期待しています。

三つ目は、自然災害を多く経験した県として、これまで蓄積した災害対応のノウハウを日本中に伝えること。災害に対する安全保障です。

四番目が、食料に対する安全保障。熊



五高記念館は、熊本地震で被災し、令和3年12月に復旧工事が完了した。工事中に見つかった創建当初からあったとみられる黒板の前で。

本県は、全国有数の農業県です。私は、子どもの時にとってもお腹が空いていた経験があります。ワクチンは待っても、食料は待てません。今回そこに、アサリの産地偽装問題が出てきました。これは、食料の安全保障の根幹を脅かす、大きな問題です。偽りのない、正しい食料をつくらなければいけません。

五番目が、温暖化が進む中での地球環境の安全保障です。農業や林業などを通して温暖化を止めるという未来像を考えています。

小川 熊本大学では、半導体人材の育成にも力を入れていきます。KMBとも以前から共同研究を進めてきましたが、包括連携協定を令和4年2月に締結しました。今後のワクチン開発研究連携や共同研究をさらに推進していきます。災害に關しては、くまもと水循環・減災研究教育センターで、実際に豪雨災害等の被災地に行つて、熊本の特徴を活かした減災・地域づくりの研究を実践的に推進していきます。食料に關しては、大学院先端科学研究部に生物環境農学国際研究センターを令和3年4月に設置し、さらに農学部をもつ東海大学と包括連携協定を締結し

ました。本学の農学研究の分野を強化し、熊本の農業に貢献したいと考えています。地球温暖化についても理学部や工学部に優秀な研究者が在籍しています。大気中のPM2.5や黄砂の研究、さらに気象についても線状降水帯の研究もしています。今、蒲島知事がおっしゃった5つの観点に關しては、熊本大学に優秀な研究者がいますから、一緒にやっていく方がいいですね。

素晴らしい伝統と歴史もつとレベルを上げたい

熊本大学への応援メッセージを。

蒲島 高校を卒業する頃、熊本大学は憧れの存在でした。特に伝統と歴史が素晴らしい。五高記念館は、震災にも負けずよく残していただいたと思います。

熊本には、かつての五高のように人が集まる東京とはまた違う歴史や文化があります。知事としては特に、文化をより立派なものにしていきたいと思っています。熊本に住んでいる人が世界に貢献している、そういう県にしたい。大学も転換期にありますね。熊本大学には、素晴らしい先生たちがおられ、素晴らしい人材を輩出されています。私は、熊本大学が頑張って熊本は幸せだと思っています。

小川 熊本大学は素晴らしい伝統を持っています。しかし、伝統に甘えているところもあるかもしれません。経済界の方から、五高時代のレベルとは違う、と言われたこともあります。もつと大学全体のレベルを上げて、伸びていきたいと考えています。

基礎研究も大学の役割ですが、社会実装につながる応用研究も大事です。TSMC進出は50年か100年に一度のチャンスですから、これを生かすべきだと考えています。

私は31年間、熊本大学に勤めていたが、2015年に、ぜひ、と請われて大阪に行くことになりました。大阪での一番の使命は、国立循環器病研究センターの移転です。移転は、「北大阪健康

医療都市」という、大阪府の吹田市と摂津市などが進めていた開発の一環で、赴任以来それに取り組んで達成することができました。そこには、すごい「まち」ができたんです。大きなビルがいくつも建ち、「まち」が変わりました。この開発に携わらせてもらったことは、幸せだと思つています。市長からも、先生が立ち上げて下さったものが続いていますよ、と言われてうれしかったですね。

今回のTSMCの進出に關しても、熊本大学としてはできるだけいい研究者を集め、人材の育成、輩出に貢献していきたいと考えています。加えて、知事が今おっしゃった、若い世代への教育、グローバルな視点を持った教育ですね。働く人がいい仕事をするためには子どもの教育環境の整備も大事です。当大学も何か協力できればと考えています。

蒲島 多様性を尊重し、グローバルな視点を持った教育から、素晴らしい人材が育つのではと期待しています。

小川 熊本大学にも非常に優秀な海外の人材がたくさんいて、今後、もつと増やそうと考えています。インターナショナル、グローバルな小中学校は絶対必要だ

と思います。ぜひ進めていきたいですね。

蒲島 私が学んだハーバード大学は、多様性をとても大事にします。私のような、農学部出身で政治学を学んだこともない、日本から来た人材を、奨学金付き且つ授業料免除で入学させてくれました。世界の変革には、多様性が不可欠です。唯一無二、ここにしかないというユニークさも大事です。

TSMCの進出は国家プロジェクトです。令和4年2月、政府は、職業能力開発短期大学校から大学への編入を認める制度、「構造改革特区」を新たに設ける方針を発表しました。現在、普通の短大や高専から大学への編入は認められていますが、職業能力開発短期大学校からは編入できない制度になっています。今回、熊本県立技術短期大学校も、その特区に入ります。国が考えているのは、かつての「シリコンアイランド九州」の復活です。

半導体研究教育センターが発足。人材確保に向けて動く

O G A W A H i s a o

1978年熊本大学医学部卒。1984年より31年に渡り、当大学に医員、助手、講師、助教授、教授として奉職。2016年国立循環器病研究センター理事長に就任。2021年4月、第14代熊本大学学長に就任。専門分野は循環器内科学。学生時代は野球に夢中。徳島県出身。

熊本大学長 小川 久雄

